

フェロモンと動物の行動に関する私見調査

松井桐人

(横浜市立野毛山動物園)

フェロモンは昆虫において発見され、以降は昆虫などを中心に機械的な行動のコントロールをする物質というニュアンスを以て研究されてきた。その後、脊椎動物にもフェロモンの受容器があり、フェロモンが刺激を与えたり行動に影響したりするものと認識されたが、近年の研究ではフェロモンに関する当初の定義が覆される発見もあった。ヒトではフェロモンの受容器が退化しているとされる。しかしフェロモン(様物質)による性周期や認知能力などへの影響も存在する可能性が議論され、過去に定義されたフェロモンとは異なるが作用が類似している広義のフェロモンの影響が研究されている。広義のフェロモンについてはまだ不明な事が多く、ヒトにおいては実験方法の設定も難しく、これまで発見報告とその否定の報告がいくつかあった。ヒト-ヒト間、ヒト-動物間でフェロモンあるいはフェロモン(様物質)の影響があるのではないかという事例を挙げ、ヒト-動物間でフェロモン(様物質)が影響する場合の利用や対処の方法について検討した。